

激に増加した。1980年代になって大型専門小売店やファーストフードなどのチェーン店が次々と開店し、一層多くの人々を誘引するようになってきている。

この60階通りの変容のゆえに、東口では「奥行きが出てきた」あるいは「街が明るくなった」と言われるが、その他の場所では逆に繁華街が縮小する傾向がみられることも明らかになった。それは地元の小売店の減少となって表われている。全国でも4年ほど前から小規模小売店の減少が始まっているが、池袋東口の商業集積地域においては既に1970年代末頃から始まり、現在も急速な減少が進んでいる。そして、商店の消失した場所に新たに建設されているのがオフィスビルである。

以前、池袋には事務所機能の集積はほとんどみられなかった。それが、サンシャインシティとい

う核が形成されて以来、その周辺に増加しつつある。都心の一等地などと比較すると、池袋に対して企業のもつイメージは依然として低く、その中核管理機能も未熟なものであるといえよう。しかし、交通の要地であることを魅力として池袋に事務所を置く企業は増えており、さらに最近、より駅に近い貸ビルを求めようようになってきている。そのため、これまで繁華街の外郭に主として形成されていた事務所地区が次第に駅に向かって伸張する傾向にある。現在大規模なオフィスビル建設の進んでいるサンシャイン通りがその例として挙げられる。

こういった池袋の新しい変容が顕著になってきたのは、ごく最近になってからである。今後さらに数年の経過を待てば、より明確な結論が得られるものと思われる。

東京区部における宗教的空間構造の変容

木村真冬

神社神道は日本古来の宗教であり、仏教・儒教・キリスト教などの外来宗教と習合しながら発展し、各時代の社会的情勢に応じて変容をとげてきた。が、それぞれの地域社会を守る神（氏神・産土神・鎮守神）を祀るという基本的な性格に変わりはない。神社は人々の空間認識の上で「聖域」とされる地にあり、地域社会の空間構造上の要であった。そこで本論文では東京区部の神社を中核とした空間構造について考察する事とし、事例として江戸の中心域にある神田明神を取上げ、地域社会との関わりを論じた。

一般に住民が聖域とみなすのは集落から間近に見える印象的な山であり、聖域と日常空間との境界に神社が立地すると考えられるが、東京区部の神社は開析谷に臨む台地辺縁部や古荒川、古利根川系河川による沖積低地の自然堤防などの微高地上に分布している。神社の種類としては稲荷・八幡・天祖・氷川神社が多く、また著名神社の勧請伝には源頼朝等の武将が戦場への途上に戦勝祈願し成就したとの型（パターン）が見られるのが特徴的である。

地縁的結合の強くなる中世末から近世頃には、

領主、農民により外から有力神が勧請され、地域全体から崇敬される氏神、地域内部に祀られる神、個々の家の屋敷神、地域を超えた請などの信仰が重層化した。一方人名は城下鎮護のための城を中心とする宗教的空間構造を編成していたと太田道灌に関する神社から推察できる。

江戸の宗教的空間構造は、こうした江戸時代以前の構造の上に成立し、幕府の江戸城、城下町建設、江戸の発展に伴って再編成されていった。東京市史稿の記録をみると江戸城の建設された天正文祿期、拡大した慶長・元和期には城内、城下の神社・寺院が外縁へ移され、明暦大火後にはさらに郭外へと遠心的な移動をしている事がわかる。その結果、江戸城外郭の鬼門の方角に将軍家産土神山王権現と城下総鎮守神田明神が置かれ、周辺地域では鬼門の方面にある台地先端部に増上寺、寛永寺といった重要寺院が配置された。また街道付近を中心に江戸の外縁には寺町が形成された。幕府は自然的条件を生かしながら江戸城を中心とする宗教的空間構造を成立させていったのである。この空間構造と地域社会との関わりをみるため、東都歳事記に記された神社と氏子地域の分布

を調べると、中心地域は山王権現と神田明神の氏子地域で二分され、周辺地域は江戸以前の構造を受け継いだ形で各地域ごとに神社を核とする地域社会の空間構造が成立していることがわかる。農村社会と比べ地縁的結合は薄い、祭礼時の御輿巡幸などに地域のまとまりが表れたと考えられる。

次に神田明神に注目してみると、江戸時代氏子地域の境界線は必ずしも明確でなかった。境内にある江戸三天主の氏子は神田明神の氏子でもあるが、その中でも竜閑川以南の町は山王祭に参加していた。江戸天王の御旅所のある大伝馬町、南伝馬町は江戸惣町で最も権威を持つ町であり、神田山王両祭に参加して権威を象徴した。つまり神田明神、山王権現の氏子地域はどちらも、江戸の中心市街地であり社会的・経済的な力の強い日本橋一帯を含んで成立していたのである。

また氏子地域の内部には稲荷が商業神として多く祀られたが、江戸以前の農耕神的な性格の変化したもの、屋敷神から町内神となったもの等様々

である。屋敷、町、神社を祀る地域、江戸全体というように空間構造は重層化していた。

明治における神仏分離、神社整理、国家神道の体系化によって地域社会の秩序は再編され、昭和戦時体制期にはより強い統制を受けた。また都市化の進行する中で地縁的結合は弱まり、神社と地域社会との関係は希薄になって宗教的空間構造そのものが見失われがちである。

神田明神の場合、平将門の御霊信仰も今だ強く、氏子区域の神田、日本橋地区は住民が比較的旧来の社会関係を維持している事もあって、地域社会との関係は喪失されてはいない。氏子区域内には町内神などが祀られており、氏子は主に町会ごとに祭礼等に参加し、祭礼は地域社会の空間を再認識する場となっている。しかし神札受納世帯数の変化をみると氏子の減少、氏子意識の減退が表われており、近年の地価急騰はこの現象に拍車をかけるものと予想される。

前橋における酸性雨の分析と考察

熊川 真由美

1 研究の目的と方法

関東地方で見られる杉枯れ現象は、窒素酸化物や硫黄酸化物などの大気汚染物質が雨水に取り込まれ酸性化した、酸性雨の影響ではないかと報告され、注目されるようになった。私は、フィールドと定めた前橋に酸性雨がどのようにもたらされているかを推察し、今後の影響について予察を行うことを今回の研究の目的とした。方法としては、実際に雨水を採取し、気象データをもとに酸性雨の降水機構を考え、現在の土壌や植物などへの影響、大気汚染状況と併せて今後の予測を行った。

2 論文要旨

日本での酸性雨の本格的な調査、研究の実施はここ10年ぐらいで、まだ不明なことも多いが、大きな汚染源のない前橋では昭和56年6月にpH 2.86という非常に酸性の強い雨が降るなど、他地域と比較して雨水のpHがやや低い。私は、6~10

月にかけて雨水の採取を行い、初期降雨3mmの分析と、一降雨における雨水成分濃度の変化に関する分析を行った。一般にpH5.6以下を酸性雨と呼んでいるが、22回の初期降雨採取では、平均でpH5.04、最もpHの低い日はpH3.86、高い日はpH6.86であり、pH5.6以下の検体は9割にあたり、非常に高い割合で酸性雨が降っていたといえる。pHの低い5日と高い5日についてアメダスなどの気象データをもとに分析したところ、pHの低い日は気象条件が大変似ていることがわかった。北東気流、収束線の存在、高層及び地上における南風である。この条件下では、まず、京浜・京葉から排出された汚染物質は、北東気流に流されて、海風と陸風の間、関東南岸でできる収束線に集められる。海からの南風は冷たい北東気流の上面を上昇してゆき、それによって汚染物質は北関東まで輸送され、雲の中に取り込まれて雨に含まれて落ちるのでpHの低い雨が降ったのではないかと考えた。また、地上の南風により、関東